

小学生の物語創作能力の発達に関する文献レビュー

中 井 悠 加

(保育教育学科)

Review on the Development of Creative Writing Skills in Primary School Children

Yuka NAKAI

キーワード：物語創作 国語教育 小学生 発達 レビュー
Creative writing, Japanese language education,
Primary school children, Development, Review

1. はじめに

平成20年度版小学校学習指導要領国語編（文部科学省，2008）において「創作」が明示され、平成29年度版（文部科学省，2017）においてもそれは引き継がれた。その当初より、「これまで実践経験の少ない創作活動について、そのねらいをどこに置くのか、どのように創作させるか、どのように評価するのか、といった問題が、具体的な指導方法のレベルで顕在化してくると思われる」（三浦，2010，p.3）と指摘がなされ、その後様々な創作関連の指導の参考となる書籍が多数企画・出版された（三藤，2014；武藤編，2018；三藤編，2019）。しかし、それから10年以上が過ぎた今なお、そうした問題にはまだ解決を見たとは言いがたいのが現状である。

創作指導をめぐる問題のなかでも多くの教育者から関心を集めているものの一つが、創作指導のカリキュラムであろう。カリキュラムが確立するということは、学校教育を通した系統的な指導や学習が実現することを意味する。そのためには、一つひとつの教材や指導の内容・方法が単発のものにならないよう、それぞれにつながりを担保し、ゆるやかに発展していく適切な道すじが描かれていることが前提となる。それはつまり、児童の年齢や個々の特性に

適した発達の道すじをふまえたカリキュラム構築が求められることを意味する。

このような創作、とりわけ物語創作のカリキュラムに係る問題にいち早く取り組んだ三藤（2014）は、読み書きの関連を念頭においたカリキュラム試論を開発し、2021年にはその理論的背景も含めた形で示した（三藤，2021）。これらは日本の国語教育における物語創作指導のあり方の一つを示す先駆的な研究として大きな意義をもつ。それは三藤本人が述べるように、教科書教材の改訂にもいかされることで（三藤，2021，p.280）、現代の学校教育現場に対して強い影響力をもっていることは間違いないと思われる。しかし、それらで示されている「段階」は児玉・堀之内（2017）において指摘されているように、「スキル習得の段階であり、物語創作における学齢発達の段階を明確に踏まえたカリキュラムであると言いはし難い」（児玉他，2017，p.10）という課題も残している。時代を遡ると、1964年に発表された小学生の作文能力の発達についての国立国語研究所による大規模な調査が行われており、そのなかで「絵を見て文章を書く力」（国立国語研究所，p.424）という物語創作に関わる力についても報告されている。しかし、この作文能力の調査に関して

は課題作文を取り上げた報告へ注目が集まる傾向があり、創作能力の発達に関する報告を基盤とした研究が展開してきているとはいえない。

また、中井・山田 (2022) ではこうした状況をふまえ、特に人物の描き方に着目して平成29年度版学習指導要領・学習指導要領解説 (以下、解説) および検定教科書を対象とした物語創作の教材分析を行った。その結果、学習指導要領や解説では高学年において物語創作についての記載がないことや、教科書会社によって物語創作の単元の数や掲載学年、学習内容に大きく差があることを明らかにし、その系統性の低さが指摘されている。

このように、現時点では、発達の視点から見れば物語創作指導は、その「系統性」に課題を有している。しかし、先に引用した児玉他 (2017) のように、物語創作における「発達」に焦点をあてた研究は少なからず見受けられる。そこで本稿では、小学生を対象とした物語創作力の発達に関する文献を概観し、児童に対して系統的な支援を行うための基礎となる物語創作発達研究に関する成果と課題を導出することを目的とする。

2. 方法

本稿では、システムティックレビューの手法を用いて文献検索を行う。システムティックレビューは、インターネットのデータベースを用いて行われる、「エビデンスレベルを表す階層においては最上位に位置づけられている」(村田, 2021, p.11) 手法である。また検索対象には、出版済みの文献だけでなく学会発表要旨などの未発表文献、いわゆる「灰色文献」も含まれることが特徴的であり、それによって出版バイアスの影響を最小限に抑えることを可能にする (Hopewell, MacDonald, Clarke, & Egger, 2007)。以上より、通常のリテラチャーレビューよりもさらに網羅的に当該分野の研究の蓄積を概観できると考えた。

ここでは、日本における研究の蓄積に焦点を当てるため、検索に用いるデータベースは国立情報学研究所が提供する、各種文献から研究データやプロジェクトの検索データベースである CiNii

Research (以下、CiNii)、国立研究開発法人科学技術振興機構が提供する雑誌記事データベースである J-STAGE を利用した。CiNii の検索フォームにおける「タイトル」に、「発達」と「作文」「書くこと」「書く力」「文章表現」または「創作」を組み合わせて5度検索した (検索日: 2022年8月18日)。「論文」タブに表示された検索の結果、同一論文の重複を除くと「発達 作文」で133件、「発達 書くこと」で16件、「創作 発達」で34件、「書く力 発達」で7件、「文章表現 発達」で25件が検出され、全215件を得た。J-STAGEでは、検索フォームの「論文タイトル」に同様の組み合わせを入力して検索したところ、順に6件、5件、17件、3件、10件が検出された。これらはすべて CiNii で検出されたものと同論文であった。

検出された論文の内容を確認し、特別支援教育 (27件)、日本語教育 (13件)、算数教育 (10件)、英語教育 (14件)、音楽・身体・芸術表現 (18件)、産業や低出生体重児、非行などを対象としたその他 (8件) および検索語の組み合わせ間における重複論文 (1件)、読解を主とする論文 (6件) をそれぞれの検出結果から除いたところ、118件の論文が国語教育における「書くこと」「作文」の発達について扱う論文として抽出された。なお、「作文」という語は平成10年度版の学習指導要領において「書くこと」という語になり、以降は「書くこと」という名称が一般的に使用されている (田中, 2015: 26)。ここでは「作文」と「書くこと」の両方を指す場合は「書くこと」に統一する。

3. 結果

1) 書くことの発達に関する文献の概観

まず、抽出できた118件の文献全体を概観する。図1に示した年別に見ると、1950年代4件、1960年代5件、1970年代10件、1980年代28件、1990年代33件、2000年代16件、2010年代17件、2020年代5件となっており、80年代・90年代に比較的研究が集中していることが分かる。

次に発表媒体別の文献数を図2に示した。学会発表要旨 (51件) が最も多く、ついで紀要 (45件、

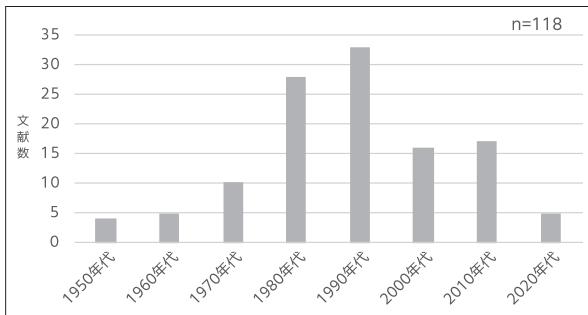


図1 刊行年代別文献数

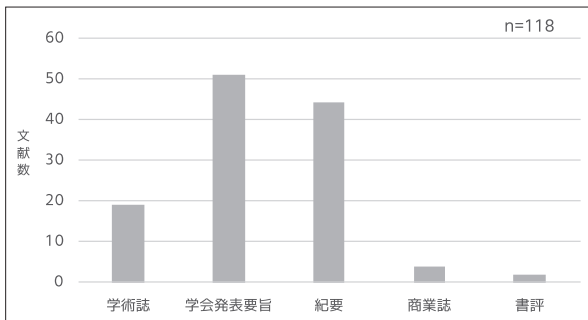


図2 発表媒体別文献数

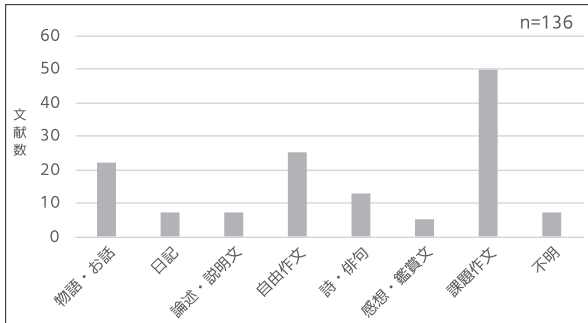


図3 文種別文献数 (延べ数)

うち1件は書評)、学術誌(18件、うち1件は書評)と続き、商業誌(4件)も少ないながら抽出された。学会発表要旨が多数を占めることから、比較的多くの研究が論文として発表されていないことが分かる。また、査読を受けた上で学術誌に発表された論文数も、紀要論文に比べるとかなり少ないことが特徴的である。

最後に、書く文章のジャンル別の文献数を図3に示した。一つの文献で複数のジャンルを扱うものについてはそれぞれカウントし、延べ数として示した

ところ、課題作文(50件)が突出して多く、次いで自由作文(25件)、物語・お話(22件)と続く。課題作文は「友だち」「手」「好きなもの」「家族」など、児童に身近なものをテーマとした課題¹⁾が与えられ、それについて書かれたものを分析対象とするものが大半を占めている。なかでも特に「友だち」(9件)「手」(6件)は頻繁に使用される課題である。このように「課題」を提示する調査は、語彙や品詞の使用など、文章表現力のなかでも特定の側面に焦点を当てるために条件を揃えたことによるものが多い。

2) 物語創作・お話づくりの発達に関する論文の概観

次に、上記118件のうち物語創作・お話づくりを取り上げた文献22件を表1に示し、概観する。

年代別に見ると、1970年代5件、1980年代7件、1990年代4件、2000年代3件、2010年代3件であり、1970・80年代に積極的に研究が進められ、その後も少ないながら関心が向けられてきたことが分かる。このうち学術誌掲載の査読論文は1件(内田, 1989a)のみであり、紀要論文7件、学会発表要旨は13件であった。「書くこと」全体よりもさらに学会発表要旨の占める数が多くなっていることが特徴的である。

また、対象範囲に幼児が含まれる文献が12件、そのうち幼児のみを対象としているのは10件であった。対象範囲に小学生が含まれる文献は10件、小学生のみを対象としているのは6件であった。中学生が含まれる文献は3件、高校生が含まれる文献は2件であるが、それぞれの校種のみを対象とした文献はどちらも0件であった。大学生・短大生を対象としている文献は4件あり、短大生のみを対象とした文献は2件であった。年代と照らし合わせると、主に幼児を対象とした研究から始まり、90年代頃から小学生を対象とした研究が急激に増加していることを見取れる。また幼児を対象とした場合は、12件中11件が口頭作文であるが、1件(内田, 1989a)のみ文字作文能力を対象としている。その他の校種はすべて文字による物語創作である。

3) 小学生の物語創作力の発達に関する文献の概観

上記の22件のうちさらに小学生を対象範囲に含

表1 物語創作、お話づくりを対象とした文献一覧

文章ジャンル	発表媒体	研究対象	刊行年	書誌情報
口頭作文(お話)	学会発表要旨	幼児	1976	藤友雄暉.(1976). 258 幼児における口頭作文の研究II(発達). 日本教育心理学会総会発表論文集, 18(0), 164-165.
口頭作文(お話)	学会発表要旨	幼児	1977	藤友雄暉.(1977). 229 幼児における口頭作文の研究IV(発達5, 口頭発表). 日本教育心理学会総会発表論文集, 19(0), 126-127.
口頭作文(お話)	学会発表要旨	幼児	1978	藤友雄暉.(1978). 216 幼児における口頭作文の研究V(発達3, 研究発表). 日本教育心理学会総会発表論文集, 20(0), 66-67.
お話	学会発表要旨	幼児	1979	桜井美恵子・国眼眞理子・八野正男・横山雅臣.(1979). 046 幼児の言語能力の発達に関する研究(2): 図版を用いた話の創作力の分析. 日本保育学会大会研究論文集, 116-117.
口頭作文(お話)	学会発表要旨	幼児	1979	藤友雄暉.(1979). 346 幼児における口頭作文の研究VIII(発達18, 研究発表). 日本教育心理学会総会発表論文集, 21(0), 360-361.
自由作文・日記・童話	紀要	幼児、小学1, 2, 3, 4年生	1980	有富洋.(1980). 一児童の文章表現力の発達: 蒲池美鶴さんのばあい. 国語教育研究, 26中, 319-327.
口頭作文(お話)	学会発表要旨	幼児	1983	藤友雄暉.(1983). 210 幼児における口頭作文の研究IX(発達2, 研究発表). 日本教育心理学会総会発表論文集, 25(0), 32-33.
物語	学会発表要旨	幼児	1984	松村暢隆.(1984). 698 認知的視点取りの異なる発達水準: 幼児期の、物語と類の有利情報課題において(教授・学習11 作文・物語理解, 研究発表). 日本教育心理学会総会発表論文集, 26(0), 766-767.
口頭作文(お話)	学会発表要旨	幼児	1985	藤友雄暉.(1985). 260 幼児における口頭作文の研究XIII(発達7, 発達). 日本教育心理学会総会発表論文集, 27(0), 140-141.
物語	学会発表要旨	小学1, 3, 5年生	1987	松田真幸・伊東昌子・小野博・林部英雄(1987). 257 文章表現力テストの開発(文章産出・理解, 発達6, 口頭発表). 日本教育心理学会総会発表論文集, 29(0), 134-135.
お話	紀要	短大生	1988	坂上佑子.(1988). “お伽噺”の創作を通してみた女子学生の心理的発達過程. 清和女子短期大学紀要, 17, 17-29.
物語	学術誌	幼児	1989	内田伸子.(1989). 物語ることから文字作文へ―読み書き能力の発達と文字作文の成立過程―(From telling story orally to writing written sentences). 読書科学 (The science of reading), 33(1), 10-24.
課題(出来事、お話、感想)	紀要	小学2, 3, 4年生	1990	牧戸章.(1990). 文章表現能力の発達に関する研究(2): 小学校中学年児童の実態調査を手がかりとして. 兵庫教育大学研究紀要. 第2分冊, 言語系教育・社会系教育・芸術系教育, 10, 29-45.
物語	学会発表要旨	幼児	1996	夏堀睦.(1996). 発達 3-PA10 描画による表現が子どもの物語創作に及ぼす影響: 創作された絵の類型と物語の意志・感情表現との関連性の検討. 日本教育心理学会総会発表論文集, 38(0), 28.
物語	学会発表要旨	小学1, 3, 4, 5年生	1998	夏堀睦.(1998). 発達 N-7 物語創作における破壊的な表現に関する分析. 日本教育心理学会総会発表論文集, 40(0), 111.
課題(説明、考え、お話、詩)	紀要	小学校2, 4, 6年生	1998	櫻本明美.(1998). 文章表現力の発達に関する一考察―表現過程に働く「発想」をとらえて. 国語と教育, 23, 3-14.
物語	紀要	幼児、小学2, 3, 4, 5, 6年生、中学生～大学生	2000	京都教育大学教育学部附属教育実践研究指導センター第3部門国語科教育部会.(2000). 作文能力の発達に関する調査研究―幼児から大学生まで. 京都教育大学教育実践研究年報(16), 1-15.
物語	学会発表要旨	小学生・中学生・高校生・大学生	2001	林美千代.(2001). 子どもの文学的創造力の発達: 『あらしのよるに』の続き創作における語りの形成. 全国大学国語教育学会国語科教育研究: 大会研究発表要旨集, 100(0), 10-13.
物語	学会発表要旨	小学1～6年・中学1～3年	2002	林美千代.(2002). 子どもの文学的創造力の発達<2>: 『あらしのよるに』の続き創作における物語内容の拡大・深化. 全国大学国語教育学会国語科教育研究: 大会研究発表要旨集, 102(0), 45-48.
物語	紀要	小学3, 4, 5, 6年生	2017	児玉忠・堀之内優樹.(2017). 物語創作における学齢発達に関する一考察: 児童の作品分析を通して. 宮城教育大学紀要 = Bulletin of Miyagi University of Education, 51, 9-18.
物語	紀要	短大生	2018	高尾淳子.(2018). 子どもの言葉の発達を促す保育者のコミュニケーション能力の見える化: 保育者養成課程学生による創作短編物語の談話分析を通じて. 同朋福祉, 25, 127-147.
課題(説明、物語)	紀要	小学6年生 (10-11才、英国)	2019	森田香緒里.(2019). <研究論文> 日英児童作文における相手意識の発達過程: コミュニケーション方略の国際比較分析. 人文科教育研究, 46, 1-16.

めた10件の文献に焦点を絞り、その詳細を検討する。表2には、著者、刊行年、掲載雑誌、研究手法、研究目的、研究対象、主な研究内容を示した。

分析対象文献10件のうち、9件は質問紙調査によって実験的に複数の児童に物語を創作させ、書かれた物語を材料として学年ごとの変化をとらえようとしたものである。1件(有富, 1980)のみ、一人の児童がすでに書いてきた文章や当該児童の様子を対象として文章内容や書くことへの意欲を分析し、その発達の特徴を捉えようとしていた。その有富

(1980)と、牧戸(1990) 櫻本(1998) 森田(2019)の4件は、物語創作に焦点を当てたものではなく、複数の文章ジャンルの一つとして物語創作も取り上げられているのみである。その他の6件については物語創作に焦点を当てていた。

物語創作を対象とした文献において行われた調査は、いずれも絵や導入部、写真、原物語などの物語を生む「刺激」を、調査対象である学年すべてに提示することで創作を促す手法を採用している。牧戸(1990)、京都教育大学(2000)、森田(2019)にお

表2 小学生の物語創作力の発達に関する文献の内容

No.	著者(刊行年) 掲載雑誌	研究手法	研究目的	研究対象者	主な研究内容
1	有富 (1980) 国語教育研究	総説	一人の児童の小学校の6年間を通した叙述力の発達過程をとらえる。	幼児、小学1, 2, 3, 4年生	蒲池文雄による、女兒の入学前から4年生までの文章表現力の学年的発達の実証的分析方法を検討し、同児童が高学年時に書いた動物の観察文を追加分析した。低学年に発達した文章表現力は、2～3年生頃から作文意欲の停滞期を迎え、表現より鑑賞の方へ重点が置かれる傾向がその一因となっている。また3年生頃から童話創作、中学年期に思索的傾向の文章など文種の分化を見せた。高学年では児童自身の叙述スタイルが完成する。
2	松田・伊東・小野・林部 (1987) 日本教育心理学会総会発表論文集	質問紙調査	言葉以外のもので与えられた情報を文章によって他者に過不足なく伝達する能力を判定するテストを開発する。	小学1, 3, 5年生	出来事を書いた連続する3つの場面のうちいずれか1枚を除いて提示された2つの場面から、そこで起きたことを人に伝えるようお話を創作。設定・展開・結末部それぞれについて記述する児童は学年が上がるほど多い。行為者、場所、行為など場面の説明に必要な最低限である情報の記述量も学年が上がるほど多くなる。1年は出来事のみ記述、設定部分が欠落。3年以上は設定部分が整うが、どの学年も行為者と場所の情報は欠落しがちである。理由と結末は学年が低いと記述する児童が少ないことが確認された。
3	夏堀 (1998) 日本教育心理学会総会発表論文集	質問紙調査	小学生の文章表現過程について、「発想」が子どもの内部でどのように働いて文章として定着していることとそれを確かめ、文章表現力の発達過程をとらえることにつなげる。	小学1, 3, 4, 5年生	写真を見て「思いつくことを5つ以上」「ひとつだけ書くとしたらどんな文章を書くか」を問い、実際に書かれた文章とそれへのふり返りを分析した。3年生頃からは自由にこぼすを想起しやすくなる。低学年は実際に体験したことや身近なできごと、中学年は思ったことや感じたこと、考えたこと、高学年はお話や詩を書きたいと考える傾向がある。4年生頃からは文種をあらかじめ念頭に置いて書き始められるようになる。
4	櫻本 (1998) 国語と教育	質問紙調査	創作された物語の破壊的な表現(死ぬ、轍かれる、爆発させる等)の使用目的による分析を行い、男子に特徴的な物語について検討する。	小学校2, 4, 6年生	物語の導入部について絵を見せながら読み聞かせ、続きを創作させる。悲劇的結末としての使用は2年生で高く、4年で減少し6年でやや増加。4・6年生は解決の前の問題設定としての使用が多い。破壊的な表現は攻撃性や学級内の雰囲気悪化の表れではなく、文化的に内在する男性的な物語形態への志向と解釈できる。
5	牧戸 (1990) 兵庫教育大学研究紀要	質問紙調査	小学校中学年における書きこぼしの発達を保障するため、小学校3年生の児童の文章表現力の実態を把握する。	小学校2, 3, 4年生	4つの課題のうち「変身作文(何かに変わったつもりで)」「『太郎おこぼし』の一節を複写し、その続きを書こう」というテーマを与え、自由に物語を書かせ、別課題で書かれた2年生・4年生の作文と比較した。漫画や劇画の影響、物語の言い回し使用、気持ちの叙述、自分自身の内面の表現、描写などの特徴が見られた。2年生は羅列的、4年生は取材力の広がりを感じさせる。
6	京都教育大学教育学部附属教育実践研究指導センター第3部門国語科教育部会 (2000) 京都教育大学教育実践研究年報	質問紙調査	視覚的刺激から、幼児から大学生までがどのようなインベンション(創構)をもち、どのような作文にしているかを調べる。	幼児、小学2, 3, 4, 5, 6年生、中学生～大学生	写真刺激および働きかけによって、幼児から大学生までが作文をする調査を行い、全体として物語をつくる傾向が強かった。2年生児童は物語の人物になって語ることが多く、3年生から人物像を自由に設定して客観的にお話をつくる子どもが半数見られる。5年生になると客観的なお話づくりが多数を占め、人物像や場面設定も詳しく結末も多様化する。6年生は物語の「発端」「展開」「結末」を意識する。
7	林 (2001) 全国大学国語教育学会国語科教育研究:大会研究発表要旨集	質問紙調査	続き創作が作話者にどのように受け止められ、どのような方略をつかって作話者が新たな語りを形成していくかを考察する。	小学生・中学生・高校生	絵本「あらしのよるに」を読み聞かせ、続き創作を書き作話後アンケートを行った。小1は物語に対する感情から語りを形成することが難しく、小2は自分の願望・欲求で物語を変化させようとする。小3はストーリーを意識し、結末を書くようになる。小4は登場人物を分化した語りができるようになる。小5は登場人物の立場をそれぞれ個として受け止め、会話を多用して交互の語りを形成する。物語も多様化し、長い。小6は原物語の継承より距離をおき、そのテーマを内面的に深めようとする。以上のように学年ごとの語りの形成の違いを確認した。
8	林 (2002) 全国大学国語教育学会国語科教育研究:大会研究発表要旨集	質問紙調査	物語の続きについての創造的想像を中心に、作話者のなかでのイメージの生成を探り、創造的想像の発達の变化を考察する。	小学1～6年・中学1～3年生	絵本「あらしのよるに」を読み聞かせ、続き創作をさせた。物語内容は原物語にはない要素を使う拡大バージョンと原物語内の言葉を使う深化バージョンに分けられ、小3から小5に登場人物の行動で物語を進める拡大バージョンが多い。小6は出来事の原因をイメージし、内面を描く言葉が出てくる。取り入れる素材として小2～3は日常の経験を使う傾向が強い。童話や昔話、夢などを利用するのは小2から各学年に見られる。文脈を無視して外れた要素を取り入れるのは中2～3に特徴的である。
9	児玉・堀之内(2017) 宮城教育大学紀要	質問紙調査	児童の学齢発達に伴って物語創作がどのように発展していくかを分析し、物語創作の発達過程を明らかにする。	小学3, 4, 5, 6年生	場面絵と本文の導入部(設定)が書かれた用紙に続き物語を創作させた。学齢が上がるとテーマが明確になる。中学年では非現実世界の「参加者」として創作し、現実世界と非現実世界が混在する。出来事で話を展開し問題解決型の構造をもたない。高学年になると現実と非現実の往還が見られ、6年生では飛躍的に伸びる。登場人物と自分を同化したファンタジー創作思考の獲得から、物語スキーマの獲得による現実と非現実の往還、そして論理的思考力の発達に伴う「語り手の視点」の獲得という段階を踏むことが示唆された。
10	森田(2019) 人文科教育研究	質問紙調査	児童の作文に相手意識がどのように表出するかを、日英の小学校低学年・高学年の児童作文を比較することで国際的・発達の観点から検討する。	小学校6年(英国・10-11歳) ※創作調査のみ抜粋	「楽しいお話(happy story)」を、各児童が母語熟達者・非母語話者という2人の相手に向けて書き分けながら書かれた作文について、話し言葉におけるコミュニケーション理論を枠組みとして表記面・語彙面・統語・構文面・相互行為面から分析し、相手に合わせて英国人児童は言語形式面に集中して調整し、日本人児童はそれに加えてコミュニケーション方略の面でも調整する。

いては、学年や実施校、校種によって提示する写真や働きかけを変えており、各調査における条件は揃えられていなかった。また、創作とは別にアンケートを実施し、その結果を参照しつつ物語の分析に使用していたのは2件(林, 2001; 2002)であったが、その質問項目の全容については示されていなかった。

4. 考察

1) 文献から見る各学年の特徴

抽出された小学生の物語創作力の発達に関する文献10件に焦点を当てて考察を行う。これら10件の文献の分析の観点としては、物語に必要な情報の有

無やその質の変化、プロット構成、語彙選択の意図、登場人物の描き方、物語世界の設定など多岐にわたる。対象学年は、1年生4件、2年生6件、3年生8件、4年生8件、5年生6件、6年生6件と、学年には大きな偏りなく調査が行われてきたことが分かる。

これらの調査から導き出された特徴を学年ごとに列挙したのが表3である。「低学年」「中学年」「高学年」と表記されたものは、それぞれ該当する2学年に記載した。分析観点や文献ごとの関心や目的は表2に示した通り多様であるものの、この表3からはおおむね次のような学年別傾向を見出せる。

まず低学年は、物語の構造や要素の意識は低く、

表3 学年別 物語創作に関わる力の特徴

学年	特徴	学年	特徴
1	<ul style="list-style-type: none"> 出来事のみ記述、設定部分が欠落 行為者と場所の情報が欠落しがち 理由と結末を記述しない 物語に対する感情から語りを形成する 物語を完結させることが難しい 	4	<ul style="list-style-type: none"> 解決の前の問題設定として破壊的表現を使用 登場人物を分化した語りができるようになる 登場人物の行動で物語を進める 童話や昔話、夢などを利用 非現実世界の「参加者」として創作 現実世界と非現実世界が混在 登場人物と自分を同化させたファンタジー創作思考 取材力に広がりが見られる
2	<ul style="list-style-type: none"> 悲劇的結末として破壊的表現を使用 自分の願望・欲求で物語を変化させようとする 日常の経験を使う傾向が強い 童話や昔話、夢などを利用 物語の人物になって語ることが多い 出来事を羅列的に並べる 	5	<ul style="list-style-type: none"> 行為者と場所の情報が欠落しがち 登場人物の立場をそれぞれ個として受け止め、会話文を多用して交互の語りを形成する 語りの戦略が多様化(物語の国、夢など) 登場人物の行動で物語を進める 童話や昔話、夢などを利用 物語スキーマの獲得による現実と非現実の往還 分量が多い 客観的なお話づくりをする 人物像や場面設定が詳しくなる 結末が多様化する
3	<ul style="list-style-type: none"> 設定部分が整う 行為者と場所の情報が欠落しがち ストーリーを意識し、結語を書くようになる 登場人物の行動で物語を進める 日常の経験を使う傾向が強い 童話や昔話、夢などを利用 非現実世界の「参加者」として創作 現実世界と非現実世界が混在 登場人物と自分を同化させたファンタジー創作思考 会話文が増える 物語の結末を示す語が増える 人物像を自由に設定して客観的にお話をつくるようになる 会話と心内語で物語を叙述する 	6	<ul style="list-style-type: none"> 解決の前の問題設定として破壊的表現を使用 原物語の継承より距離をおき、そのテーマを内面的に深めようとする 出来事の原因をイメージし、内面を描く言葉が出てくる 童話や昔話、夢などを利用 現実と非現実の往還が見られる 「語り手の視点」の獲得 内言と外言を区別して表現する 社会に対する自分の意見や作品批評が作話の理由になる 「発端」「展開」「結末」を意識してつくる

自分の感情や願望、日常経験を使うなど、自分自身の視点を使って日記にほど近い物語を作る傾向にある。しかし他の学年に比べて抽出された特徴は少なめであり、詳しく解明されていない学年であることが見て取れる。内田（1990）は、「幼児期の終わりまでにはまとまった文章を生み出す能力がかなり整っている」（内田，1990，p.122）ことを指摘し、それを土台にして書きことばで表すことが求められる小学校入門期の課題を追究した。さらに、書字力が習熟すれば口頭作文と文字作文の差がなくなると述べる。このことから、口頭によるお話づくりを使った調査が主である幼児期と、書字能力が確立する中学年との狭間であることが低学年の創作力の特徴の少なさに起因しているのかもしれない。

3年生における、「めでたしめでたし」や「おしまい」などの結語の出現は複数の文献（松田他，1987；牧戸，1990；林，2001）で指摘されており、自分とは違う人物を設定したり会話文を使ったりするなど、「物語」であることを意識しはじめていることを見出せる。その兆しは4年生頃でおおむね定着していくことも見てとれる。

5年生は、詳細な設定のもと登場人物個々の視点の使用が目立つようになり、語りや結末などの「多様化」がキーワードとなっていることが分かる（京都教育大学，2000；林，2001）。そのような変化が、書く量の増加につながるのかもしれない。6年生については、他学年との違いが多く指摘されていることが特徴的であり、5年生から見られた物語スキーマの定着（児玉他，2017）とその使用の姿が窺える。

「外的な要因」として、例えば3年生以降で出現するこれらの物語的言い回しや物語スキーマについては、それらの学年で触れている「読むこと」の教材や日常の読書、アニメや漫画、テレビドラマなどの影響は少なからず指摘できるだろう。特に創作に使う同じ文字メディアとして、物語教材における学習内容の影響は大きいと考えられる。例えば現行の令和2年度版教科書でいえば、「かさこじぞう」（2年下・東京書籍）や「たぬきの糸車」（1年下・光村図書）などの昔話を学習した後は「むかしむかし、あるところに…」「むかし、ある山おくに、」といっ

た言い回しを使うようになる可能性は高い。「注文の多い料理店」（5年・東京書籍）「やまなし」（6年・光村図書）などの非現実要素が強い物語を学習した後は、自分の創作にもその要素を盛り込もうとするだろう。その読み書き関連に焦点を当てたのが三藤（2019）による継続的な研究だといえるが、スキルとしての段階が示されたのみであり、創作に現れる小学生の認知の変化を記述したのではないところに課題があるのはすでに述べた通りである。

2) 小学校における物語創作指導研究の課題

以上のように大まかな特徴は確認できるが、例えば5年生において「行為者（人物：中井補）と場所の情報欠落しがち」（松田他，1987）という指摘と「人物像や場面設定が詳しくなる」（京都教育大学，2000；林，2001）といったように、真逆の特徴が析出されているのはどの学年についてもいえることである。それは、各文献における調査方法の違いや、その調査対象となった児童の特性などによって生じるものと考えられる。その点についての検証を難しくしている要因の一つとして、それぞれの調査において作られた物語の分析は、物語からのみ抽出できる材料を基に行われていることが挙げられる。すでに述べた通り、物語創作力に焦点を当てて調査を行った文献6件のうち、創作課題とは別に質問項目を設けた調査を行ったのは林（2001；2002）のみである。分析に使用されていたのは、「楽しかったかどうか」「書いてみて思うこと（感想）」といった2項目であり、「創作への構え、態度」としてまとめられていた。しかし、それらの回答は直接物語創作の発達の様相を分析することには使用されていなかった。つまりそれは、小学生児童の物語創作力の発達を捉えるための、その創作行為に影響を及ぼす別の要因が考慮されないままこれまで研究が蓄積されてきたことを示している。

この点については、石田・森（1985）が「研究者の主観や少数の事例的研究に基づくものが多く、十分な実証的裏付けを持つとはいいがたい」（p.125）と指摘したことにも通じている。内田（1982）は、個人の既有知識や様々な経験をもとに新しく表現を生み出していくのが物語するという行為であると述べ

た。そうであれば、子どもたちの物語創作の力の発達には、国語科での読むこと・書くことの学びだけでなく、日々の経験のなかで育まれる力も多分に影響しているはずである。例えば、今回分析した調査結果のなかでも登場人物の描き方や語りの形成、視点の変化などは、子どもたちが他者の意図や感情を適切に理解し適切に関係を育む力である対人関係能力と関係するかもしれない。その点で、森田(2019)では、物語に焦点化されているわけではないが、相手意識の発達と書く力との関係を探究し、その語や文の選び方など表現に着目して分析を行っている。まずはそうした日常生活のなかで育まれる力と創作力の発達に相関があるのかどうか、あるとすれば物語創作のどこにどのような形で現れるのかに焦点を当てた研究が進むことが望まれる。つまりそれは、物語の特徴を分析するのではなく、児童の認知がどう物語に現れているのかに焦点を絞る必要性を示すものである。

5. まとめ

本研究では、小学生児童の物語創作力の発達について、システマティックレビューの手法に則って考察を進めてきた。国語教育を中心とした母語の教育全体で見ると、書く力の発達に関する研究としては言い難いことが分かった。また、物語創作に焦点を絞ると、大正期から研究が確認でき、その研究成果にも共通点が一定数確認できたことは一つの収穫である。

しかしその一方で、それぞれの調査結果に一部不整合が見受けられることも指摘できる。それは、システマティックレビューによって検出された文献の多くが学会発表要旨に集中していることとも関連しているかもしれない。通常はリテラチャーレビューや先行研究としての参照対象にならないため、これらの研究の「種」の結果は見過ごされやすい。学術誌に掲載されたものが少ないことも特徴的である。そうしたグレーゾーンに物語創作の発達研究が集中していることは、この領域の研究の難しさを暗に示しているともいえる。

ただし、国語教育研究は、論文だけでなく書籍として研究が蓄積されることも分野的な特徴であるが、本稿では書籍を対象としていない。また今回はインターネット上のデータベースにのみ絞ったため、国語教育学の実践を中心とした研究が蓄積されてきた日本国語教育学会『月間国語科教育』も対象としていない。これらのことから、日本における研究を網羅したとは言い難く、課題が残る結果となった。

また、これは「発達」を対象とした研究の多くにいえることかもしれないが、今回の調査でもその傾向が見られたように、こうした調査の結果は「この年齢であれば概ね〇〇ができる」という形での結論に行き着くことが大半である。もちろんそのような典型的な傾向を特定することは、カリキュラム構築や授業づくりにおいて重要な知見となることは間違いない。しかし、ともすれば「この年齢では〇〇ができなければならない」という考えに囚われすぎてしまい、個々の別の発達要因を見過ごしたまま、必ずしもその児童には適切ではないかもしれない指導・支援を提供してしまう恐れもある。レビューを見る限り、創作力の発達を捉える変数としては学年・年齢のみが設定されているのが物語創作の発達研究の現状といえよう。今後は、これらの知見をふまえた上で、個々の創作力の発達とそれを促す外的要因との関係を明らかにする研究が待たれる。

注

1. 抽出できた「課題」は以下の通り。友だち(9件)、手(6件)好きなもの、遊び、ゆめ、家族、好きな作品(各2件)、ほくの／私のがんばったこと、身近な出来事、時事的なもの、言語、町たんけん、わたしの成長、テレビと私、わたしの学校、遠足、私はなぜ〇〇が好きか、自分、夏休みの思い出、夏休みの予定(各1件)

附記

本研究はJSPS科研費19H01670の助成を受けたものです。

引用文献

- *分析対象論文
- *有富洋. (1980). 一児童の文章表現力の発達：蒲池美鶴さんのばあい. 国語教育研究, 26中, 319-327.
- *藤友雄暉. (1976). 258 幼児における口頭作文の研究II (発達). 日本教育心理学会総会発表論文集, 18(0), 164-165.
- *藤友雄暉. (1977). 229 幼児における口頭作文の研究IV (発達5, 口頭発表). 日本教育心理学会総会発表論文集, 19(0), 126-127.
- *藤友雄暉. (1978). 216 幼児における口頭作文の研究V (発達3, 研究発表). 日本教育心理学会総会発表論文集, 20(0), 66-67.
- *藤友雄暉. (1979). 346 幼児における口頭作文の研究VIII (発達18, 研究発表). 日本教育心理学会総会発表論文集, 21(0), 360-361.
- *藤友雄暉. (1983). 210 幼児における口頭作文の研究IX (発達2, 研究発表). 日本教育心理学会総会発表論文集, 25(0), 32-33.
- *藤友雄暉. (1985). 260 幼児における口頭作文の研究XIII (発達7, 発達). 日本教育心理学会総会発表論文集, 27(0), 140-141.
- *林美千代. (2001). 子どもの文学的創造力の発達：『あらしのよるに』の続き創作における語りの形成. 全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集, 100(0), 10-13.
- *林美千代. (2002). 子どもの文学的創造力の発達<2>：『あらしのよるに』の続き創作における物語内容の拡大・深化. 全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集, 102(0), 45-48.
- Hopewell S, McDonald S, Clarke MJ, Egger M. Grey. (2007). literature in meta - analyses of randomized trials of health care interventions. Cochrane Database of Systematic Reviews, Issue 2. Art. No.: MR000010.
- 石田潤・森敏昭. (1985). 小学生の文章表現の発達の变化. 広島大学教育学部紀要. 第一部, 33, 125-131.
- *児玉忠・堀之内優樹. (2017). 物語創作における学齢発達に関する一考察：児童の作品分析を通して. 宮城教育大学紀要 = Bulletin of Miyagi University of Education, 51, 9-18.
- 国立国語研究所. (1964). 小学生の言語能力の発達. 東京：明治図書.
- *京都教育大学教育学部附属教育実践研究指導センター第3部門国語科教育部会. (2000). 作文能力の発達に関する調査研究-幼児から大学生まで. 京都教育大学教育実践研究年報 (16), 1-15.
- *牧戸章. (1990). 文章表現能力の発達に関する研究 (2)：小学校中学年児童の実態調査を手がかりとして. 兵庫教育大学研究紀要. 第2分冊, 言語系教育・社会系教育・芸術系教育, 10, 29-45.
- *松田真幸・伊東昌子・小野博・林部英雄. (1987). 257 文章表現力テストの開発 (文章産出・理解, 発達6, 口頭発表). 日本教育心理学会総会発表論文集, 29(0), 134-135.
- *松村暢隆. (1984). 698 認知的視点取りの異なる発達水準：幼児期の, 物語と類の有利情報課題において (教授・学習11 作文・物語理解, 研究発表). 日本教育心理学会総会発表論文集, 26(0), 766-767.
- 三藤恭弘. (2010). 書く力がぐんぐん身につく！「物語の創作／お話づくり」のカリキュラム30, 東京：明治図書.
- 三藤恭弘編. (2019). 小学校「物語づくり」学習の指導 実践史をふまえて, 広島：溪水社.
- 三藤恭弘. (2021). 「物語の創作」学習指導の研究, 広島：溪水社.
- 文部科学省. (2008). 平成20年度版小学校学習指導要領.
- 文部科学省. (2017). 平成29年度版小学校学習指導要領.
- 森田香緒里. (2019). 日英児童作文における相手意識の発達過程：コミュニケーション方略の国際比較分析. 人文科教育研究, 46, 1-16.
- 中井悠加・山田洋平. (2022). 小学校国語科における物語創作教材の分析—人物の描き方と役割取得能力の発達の関連に着目して—. 島根国語国文.

- 第14号, 21-34.
- *夏堀睦. (1996). 発達 3-PA10 描画による表現が子どもの物語創作に及ぼす影響：創作された絵の種類と物語の意志・感情表現との関連性の検討. 日本教育心理学会総会発表論文集, 38(0), 28.
- *夏堀睦. (1998). 発達 N-7 物語創作における破壊的な表現に関する分析. 日本教育心理学会総会発表論文集, 40(0), 111.
- 三浦和尚. (2010). 本パネルディスカッションの意図（コーディネーターの言葉、短詩型の創作指導の意義と方法, 秋期学会 第117回愛媛大会), 国語科教育, 68, 全国大学国語教育学会.
- 村田祐樹. (2021). システムティックレビューの進め方, 日本アスレティックトレーニング学会誌, 7(1), 11-15.
- 武藤清吾編. (2018). 中学校・高等学校「文学創作」の学習指導, 広島：溪水社.
- *坂上佑子. (1988). “お伽噺”の創作を通してみた女子学生の心理的発達過程. 清和女子短期大学紀要, 17, 17-29.
- *桜井美恵子・国眼真理子・八野正男・横山雅臣. (1979). 046 幼児の言語能力の発達に関する研究(2)：図版を用いた話の創作力の分析. 日本保育学会大会研究論文集, 116-117.
- *櫻本明美. (1998). 文章表現力の発達に関する一考察－表現過程に働く「発想」をとらえて. 国語と教育, 23, 3-14.
- *高尾淳子. (2018). 子どもの言葉の発達を促す保育者のコミュニケーション能力の見える化：保育者養成課程学生による創作短編物語の談話分析を通じて. 同朋福祉, 25, 127-147.
- 田中宏幸. (2015). 15 作文力. In 高木まさき, 寺井正憲, 中村敦雄, 山元隆春編著. (2015). 国語科重要用語辞典. 東京：明治図書, 26.
- 内田伸子. (1982). 幼児はいかに物語を創るか?. 教育心理学研究. 第30 卷, 第3号, 47-58.
- *内田伸子. (1989a). 物語ることから文字作文へ－読み書き能力の発達と文字作文の成立過程－ (From telling story orally to writing written sentences). 読書科学 (The science of reading), 33(1), 10-24.
- *内田伸子. (1989b). 子どもの推敲方略の発達－作文における自己内対話の過程. お茶の水女子大学人文科学紀要 (42), p75-104.
- 内田伸子. (1990). 子どもの文章—書くこと考えること. 東京：東京大学出版会.

(受稿 2022年9月30日, 受理 2022年11月9日)